

理想のライフコースとの一致度と 仕事満足感・夫婦関係満足感・育児満足感からみた 成人期女性の生きがい感

熊野道子

要約：本研究の目的は、多様な生き方が可能な成人期女性における生きがい感の規定要因を、現実のライフコースと理想のライフコースが一致しているか否かの観点と、ライフコースの重要で基礎的な領域である仕事、夫婦関係、育児に関する満足感の観点から検討して明らかにすることである。調査対象者は30-40歳代の日本人女性1,200名で、配偶者・子ども・就業の有無により現実のライフコース6群を設定し、上述の観点に関するweb調査を実施した。6群すべてで現実と理想のライフコースの一致度とライフコースにかかわる満足感が生きがい感に影響していた。子どものいない専業主婦群と結婚・出産退職後の再就職群は、現実のライフコースと理想のライフコースが一致していることが生きがい感により強く影響していた。それら以外の4群は、ライフコースにかかわる仕事、夫婦関係、育児の満足感が生きがい感に与える影響がより強かった。

問題と目的

社会的背景

近年、成人期女性は多様な生き方が可能となり、ライフコース¹⁾(就職・結婚・出産などの人生の出来事をたどる道筋)も多様な中から選択できると言われている。1990年代には女性の社会進出が謳われ、仕事を通じての自己実現を目指し、仕事と家庭の両立を希望する女性が増えてきていたが(内閣府, 2013)、最近の若者意識調査(厚生労働省, 2013)では専業主婦志向の高まりが指摘されている。晩婚化、非婚化もすすみ、子どもを持つことも選択肢の一つとなってきた。

女性のライフコース選択には、生き方が問われ、その生き方から生きがい感を感じられるかの

判断が深く関わっている。さまざまなライフコースの中で、いかに女性が生きがい感を感じながら生きていくかが大切である。

生きがい感の先行研究

生きがい感は、日本人にとって、よりよい人生や充実した人生を成し遂げるための重要な概念である。精神科医であり、生きがい研究の創始者である神谷(1966)が論じるには、生きがいは曖昧さによって特徴づけられた包括的な概念であり、生きがいは西洋語で相当するものより、哲学的でなく、直観的で、非合理的で複雑なニュアンスをもつ。

これまでに多くの研究により、生きがい感は日本人の幸福感を考える上で欠かせないことが論じられ、日本固有の生きがい感からのアプローチの重要性が指摘されている(Kumano, 2018 a;

Mathews, 2009 ; Ryff et al., 2015)。

一方、欧米では、生きがい感に類似した概念である幸福感に関する実証的な心理学研究が行われて、主観的幸福感 (subjective well-being) (Diener, 1984) や心理的幸福感 (psychological well-being) (Ryff, 1989) が提唱されている。そして、Diener と Ryff の理論に基づいた多くの研究が行われている (Schwartz, Quaranto, Healy, Benedict, & Vollmer, 2013)。

生きがい感の定義をレビューする研究が行われているが (近藤, 1997 ; 長谷川・藤原・星, 2001), 生きがい感の定義は合意に至っておらず、その理由として、「生きがい」という用語が生きがいをもたらす対象、生きがい感を感じている精神状態、および、その精神状態に至るためのプロセスを含んで使用されているためであると指摘されている (熊野, 2012)。熊野 (2012) は、「生きがい」という用語について、生きがいをもたらす対象を「生きがい対象」として分離し、「生きている張り合い、生きている価値を感じる状態、もしくはその状態に至るプロセスを含む用語」と定義している。そして、従来になかった視点として、生きがいを感じている精神状態とその状態に至るためのプロセスの二つに分離して整理し、生きがいを感じている精神状態を「状態としての生きがい感」、その状態に至るためのプロセスを「生きがい感へのプロセス」と定義している。「生きがい感へのプロセス」は、過去の意味づけ、未来の目標意識、ポジティブ状況の没頭、ネガティブ状況の受容・コーピング (対処) であった (熊野, 2012)。本研究では、プロセスではなく、生きがいを感じている精神状態に注目するので、本研究での「生きがい感」は、熊野 (2012) の「状態としての生きがい感」に該当し、「生きている張り合い、生きている価値を感じている状態」と定義する。

生きがい感を測定する尺度には、海外の類似し

た概念が日本語で生きがいと紹介されている尺度と日本語の生きがい感を測定する目的で作成された尺度がある。前者としては、広く使用されている尺度として、PGC モラールスケールと PIL がある。PGC モラールスケールは、高齢者を対象としたモラールを測定する尺度である (Lawton, 1972, 1975)。この PGC モラールスケールが日本で標準化され (前田・浅野・谷口, 1979 ; 古谷野, 1981), 高齢者の生きがい感を測定する尺度として紹介された。PGC モラールスケールを用いて、高齢者の生きがい感に関する研究が数多く発表されている (出村・南・野田・石川・野田, 2002 ; 浜・川原, 1999)。

PIL (Purpose in Life Test) は、Frankl (1947 霜山訳 1961) の理論に基づいて、人生の意味や目的意識を測定するテストとして作成された (Crumbaugh & Maholick, 1964)。Frankl (1947 霜山訳 1961) は、強制収容所での体験をもとに、極限状況でも生きる意味を見出すことができることを著した。PIL は日本語に翻訳され、日本でも生きがい感を測定する尺度として紹介され (佐藤, 1975), 高齢者だけでなく大学生なども対象として生きがい感を測定する尺度として発表されている (河合, 1981 ; 大石・安川・濁川・飯田, 2007)。

一方、後者の日本語の生きがい感を測定する目的として作成された尺度には、近藤・鎌田 (1998) の生きがい感スケールと熊野 (2013) の「状態としての生きがい感尺度」と「生きがい感へのプロセス尺度」がある。近藤・鎌田 (1998) の生きがい感スケールは、生きがい感の概念についての自由記述調査をもとに、生きがい感を定義し、生きがい感を測定する尺度を作成している。熊野 (2013) では、生きがいを感じている精神状態とその状態に至るプロセスの二つに分離して、それぞれに対する尺度を作成している。

女性のライフコースにおける生きがい感や生きがい感に関連した精神状態に関する先行研究

これまでに女性のライフコースにおける生きがい感や生きがい感に関連した精神状態に関する先行研究では、婚姻状況や子どもの有無に着目した研究や、出産した女性に対し、有職か否かに着目した、有職の母親と専業主婦の母親の育児不安・育児肯定感や幸福感的比較研究が最も多く行われている。

婚姻状況に関しては、既婚女性は未婚女性より幸福感が高いことが示されている(白石・白石, 2006)。子どもの有無に関しては、子どもがいることは幸福感にプラスの要因であることが指摘されている(内閣府, 2008)。また、子どもは生きがいの対象として大きな源泉であることが指摘されており(神谷, 1966)、子どものいる人は、子どもの存在は生きがいであり、人生に豊かさを与えると考えている人の割合が高かった(内閣府, 2005)。

しかしながら、子どもがいることにより幸福感は低下するとの指摘もあり(Hansen, 2012)、日本でも若年層の女性で同様の指摘がある(上田・川原, 2013)。子どもの誕生により、女性の夫婦関係満足感や夫婦の親密性が低下すること(小野寺, 2005; 山口, 2007)に関係している可能性が考えられる。

有職の母親と専業主婦の母親に関しては、有職の母親が専業主婦の母親より、育児不安が低いという結果が得られている(牧野, 1989; 冬木, 2000)。また、有職の母親が専業主婦の母親より、幸福感や生き方満足度などポジティブな精神状態が高いという結果が得られている(澤田, 2006; 平山・柏木, 2005)。一方、抑うつは、有職の母親の方が専業主婦の母親より高くなっている(小泉・菅原・前川・北村, 2003)。すなわち、有職の母親は専業主婦の母親より、育児不安が低く、幸福感は高いが、抑うつが高いことが報告されて

いる。

なお、有職の母親と専業主婦の母親において、出産前後の生きがい感の変化に着目した研究では、出産前の生きがい感と比較すると、専業主婦の母親の方が有職の母親よりも出産による生きがい感の高まりがみられた(熊野, 2018 b)。

結婚・出産後に再就職をした女性は、望む職を得ることができず、結婚・出産前の職と比べ満足できる就業ができないことが指摘されている(内閣府男女共同参画局, 2006)。さらに、中年期女性は、キャリアの妥協により人生の意味を低下させ、抑うつを高めることが示されている(Carr, 1997)。

以上のように、女性は結婚や就業や出産などライフコースの状況と生きがい感や生きがい感に関連した精神状態とのかかわりが大きいと考えられる。

しかしながら、これらは、既婚女性と未婚女性の比較や、子どもがいる場合といない場合との比較や、有職の母親と専業主婦の母親の比較や、結婚・出産前と再就職時の就業の比較であり、理想のライフコースか否かとの関係は明らかにされていない。たとえば、就業せず育児に専念している専業主婦の母親には、望んで専業主婦をしている場合と、就業を継続したい希望を断念して、専業主婦になっている場合があり、どちらであるかによって、その女性の生きがい感や生きがい感に関連した精神状態を感じる程度は異なってくると考えられる。また、有職の母親においても、望んで就業と子育てを両立している場合と、就業せず育児に専念するという希望を断念して、就業と育児を両立している場合がある。すなわち、これらの指標の評価には、単なるライフコース別の要因だけでなく、そのライフコースが理想のものなのか否かが強く関係していると考えられる。

現実のライフコースと理想のライフコースのずれと精神状態の先行研究

一方、国立社会保障・人口問題研究所（2015）によると、未婚女性が理想とするライフコースと実際になりそうだと考える予定ライフコースの間にはずれがある者が多いことが指摘されている。

現実のライフコースと理想のライフコースと精神状態との関係については、母親の就業や女性の出産に関する現実と理想のライフコースの観点から、これまでにいくつかの研究が行われている。第一に、母親の就業については、Hock & DeMeis（1990）では、専業主婦の母親を対象として、就業を希望している群は、専業主婦を希望している群より抑うつが高いことを示している。また、Holmes, Erickson, & Hill（2012）でも、母親の理想の就業状況（フルタイム、パートタイム、専業主婦）が現実の就業状況と一致していることが、心理的幸福感を高めることを指摘している。わが国でも、少数の事例ではあるが、就業を希望している専業主婦の母親や専業主婦を希望している有職の母親に抑うつ傾向がみられることが報告されている（小林, 1996）。

第二に、女性の出産については、不妊に対する女性の感情反応に自己不一致理論を適用した研究によると（Kikendall, 1994）、母親になるという理想自己とその個人的望みが満たされないという現実自己との不一致により落胆し、抑うつを経験すると論じられている。

以上のように、望んで専業主婦の母親になっている場合は、抑うつが低くなっており（Hock & DeMeis, 1990）、生きがい感は高くなると考えられる。一方、望まず専業主婦の母親や有職の母親になっている場合（小林, 1996）や不妊の場合（Kikendall, 1994）は、抑うつ傾向がみられており、理想の生き方ではないので生きがい感が低くなる可能性が考えられる。すなわち、成人期女性については、現実のライフコースでの状況より

も、現実のライフコースが理想のライフコースと一致しているか否かが生きがい感に関係すると考えられる。しかし、これらの研究（Hock & DeMeis, 1990；Holmes et al., 2012；小林, 1996；Kikendall, 1994）では、専業主婦の母親の現実のライフコースや子どものいない現実のライフコースが理想のライフコースと一致しているか否かがその精神状態に関係することは示されているが、現実のライフコースの領域から得られる満足感からの影響に関する検討は行われていない。

本研究の目的

そこで、本研究は、多様な生き方の選択肢が存在する成人期女性における生きがい感の規定要因を、現実のライフコースと理想のライフコースが一致しているか否かと、ライフコースの重要な領域から得られる満足感の観点から検討を行うことにより、明らかにすることを目的とする。

本研究での生きがい感を、熊野（2012）の「状態としての生きがい感」と定義し、生きがい感の測定に熊野（2013）の「状態としての生きがい感尺度」を用いる。

女性のライフコースについては、様々な選択肢が考えられるが、日本人女性に広く調査している第14回出生動向調査（国立社会保障・人口問題研究所, 2010）での分類を参考にして、Table 1 に示す現実のライフコース6群（以下、6群とする）を設定した。以下、6群の各群の表記にはTable 1の略称を用いる。女性のライフコース選択における主要な要素である仕事・結婚・出産の

Table 1 現実のライフコース6群

略称	群の分類
専母 G	子どものいる専業主婦群
専婦 G	子どものいない専業主婦群
再就 G	結婚・出産で退職後に再就職した女性群
両立 G	出産後も就業継続している女性群
就継 G	就業継続している子どものいない女性群
未婚 G	未婚で就業継続している女性群

重要な領域である仕事、夫婦関係、育児に関する満足感について検討を行い、6群のそれぞれの群の生きがい感の規定要因を明らかにする。

方 法

調査対象

調査会社の30-40歳代女性の登録モニターに対し、2015年12月にweb調査を行った。婚姻状況、子どもの有無、就労状況に関する予備調査を行い、現実のライフコース6群をサンプリングし、回答を求めた。

なお、ライフコースをできるだけ単純にするために、未婚G以外の5群における婚姻関係は死別、離別は含まず、調査時点で配偶者がいる者に限定した。また、職業を有する群(再就G, 両立G, 就継G, 未婚G)はパートを含まず、正規の会社員に限定した。回答に不備のなかった各群につき30-40歳代の女性200名ずつを最終的な分析対象者とした。各群の年齢は、平均38.7-40.2歳、SD 5.5-5.7歳で同様の分布であった。

調査項目

生きがい感尺度 生きがい感を測定する尺度に熊野(2013)の「状態としての生きがい感尺度」(12項目)を用い、6件法で回答を求めた。この尺度は、信頼性・妥当性が検証されている(熊野, 2013)。

現実のライフコースと理想のライフコースの一致度 現実の人生と切りはなして、理想とする人生のタイプをTable 2の7つから1つ選択することを求めた。その後、「前問の女性の生き方タイプにおいて、あなたが理想とする人生と現実の人生は一致していますか。」と尋ね、「まったく一致していない(1)」から「とても一致している(6)」までの6件法で回答を求めた。

ライフコースにかかわる満足感 夫婦関係満足

Table 2 理想とするライフコース

タイプ	タイプの説明
未婚就業	結婚せず、仕事を続ける。
就業継続	結婚し、子どもを持たず、仕事を続ける。
専業主婦	結婚し、子どもを持たず、仕事を持たない。
両立	結婚し、子どもを持ち、仕事も続ける。
再就職	結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ。
専業主婦	結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない。
その他	

感については、諸井(1996)、田中(2010)、尾形・坂西・福田・森下(2015)を参考にして「夫婦でお互いのことを大切に思っている」など5項目を作成した。育児満足感については、熊野(2017)の育児感情尺度の下位尺度である育児肯定感尺度(5項目)を使用した。仕事満足感については、伊藤・相良・池田(2006)、松浦(2007)を参考にして「今の仕事に、やりがいを感じている」など7項目を作成した。それぞれの尺度の各項目について、「まったく当てはまらない(1)」から「とても当てはまる(6)」までの6件法で回答を求めた。

分析方法

本研究の分析には、IBM SPSS Statistics (ver. 22.0)を使用した。

倫理的配慮

本調査での倫理的配慮として、冒頭で調査目的を説明した。そして、調査が強制でなく、自由に拒否できることを説明し、調査の同意を得た。得られたデータは統計的に処理されることや研究以外に使用しないことを説明した。また、調査会社に調査対象者の個人情報保護されることを確認した。本調査実施にあたり、大阪大谷大学文学部・教育学部・人間社会学部研究倫理委員会の承認を得た。

結 果

因子分析

生きがい感 生きがい感尺度に対して最尤法による因子分析を行ったところ (Table 3), 固有値の変化により 1 因子構造が妥当であると判断された。Cronbach の α 係数は .97 であり, 信頼性が高いことが確認された。

ライフコースにかかわる満足感 夫婦関係満足感尺度 5 項目, 育児満足感尺度 5 項目, 仕事満足感尺度 7 項目のそれぞれの尺度に対して最尤法による因子分析を行ったところ, 固有値の変化より 3 つすべての尺度で 1 因子構造が妥当であると判断された。夫婦関係満足感尺度の因子分析結果を Table 4, 仕事満足感尺度の因子分析結果を Table 5 に示す。Cronbach の α 係数は, 夫婦関係満足感が .97, 育児満足感が .90, 仕事満足感が .89 で

Table 3 生きがい感の因子分析結果 (最尤法)

	<i>FI</i>	<i>h</i> ²
私は、自分の存在価値を感じている。	.91	.83
自分の生きていることに意味や価値を感じている。	.91	.83
私の毎日は充実していると感じている。	.89	.79
私は、自分の人生にはっきりした意味を感じている。	.88	.77
私の人生は、すばらしい人生である。	.86	.75
私は、自分が今ここに生きている意味を十分に理解している。	.86	.75
私は、毎日を生き生きと過ごしている。	.86	.74
私は、存在する価値のある人間である。	.86	.73
毎日の生活にハリがある。	.84	.71
自分がその場にいる必要があると感じている。	.83	.70
私は、自分の理想とする人生を歩んでいる。	.81	.66
私は自分の人生に満足している。	.81	.66
固有値	8.91	
説明率 (%)	74.26	

Table 4 夫婦関係満足感の因子分析結果 (最尤法)

	<i>FI</i>	<i>h</i> ²
夫婦でお互いのことを大切に思っている。	.95	.91
配偶者との関係は円満である。	.94	.88
配偶者からの思いやりに満足している。	.93	.86
配偶者とのコミュニケーションに満足している。	.92	.84
夫婦で協力して生活を送っている。	.91	.84
固有値	4.32	
説明率 (%)	86.48	

Table 5 仕事満足感の因子分析結果 (最尤法)

	<i>FI</i>	<i>h</i> ²
今の仕事に、やりがいを感じている。	.93	.86
今の仕事は、私の人生に充実感をもたらす。	.92	.85
今の仕事を通じて、私は成長している。	.81	.66
今の仕事は、私に向いている。	.77	.60
今の職場での地位に、満足している。	.63	.39
今の職場の人間関係は、うまくいっている。	.56	.31
今の仕事の給料に満足している。	.49	.24
固有値	3.92	
説明率 (%)	55.94	

信頼性が高いことが確認された。

6群の基礎統計

6群について、各変数の基礎統計を示す (Table 6)。年齢については、6群の平均値・SDより、6群ともに大きな偏りがなかった。

生きがい感 生きがい感の6群の1要因分散分析の結果、有意差が認められた ($F(5, 1194) = 6.7, p < .001, \eta^2 = .027$)。TukeyのHSD検定による下位検定の結果、未婚Gは両立G、就継G、専母Gより有意に低く ($p < .05$)、専母Gは両立Gより有意に低かった ($p < .05$)。

ライフコースにかかわる満足感 ライフコースにかかわる満足感として、夫婦関係満足感、育児満足感、仕事満足感の6群の1要因分散分析を行った。その結果、有意差がみられたのは夫婦関係満足感だけであった ($F(4, 995) = 25.2, p < .001, \eta^2 = .092$)。TukeyのHSD検定の結果、再就Gはその他の4群より有意に低く ($p < .05$)、両立Gと専母Gは専母Gと就継Gより有意に低かった ($p < .05$)。すなわち、夫婦関係満足感

子どもがいない群の専母Gと就継Gは高く、次に子どもがいる群の専母Gと両立Gが続く、再就Gが最も低かった。

生きがい感と他の変数との相関係数

6群について、生きがい感と一致度、ならびに、生きがい感とライフコースにかかわる3つの満足感との相関係数をTable 7に示す。一致度と生きがい感の相関係数は、就継Gと未婚Gは中程度の正の相関 (.36-.37)であったが、これら以外の4群は、さらに強い正の相関であった (.50-.56)。夫婦関係満足感と生きがい感は就継Gでは中程度の正の相関で (.34)、両立Gが強い正の相関であった (.61)。育児満足感と生きがい感はどの群も .46-.59と強い正の相関であった。仕事満足感と生きがい感はどの群も強い正の相関であった (.45-.59)。すなわち、生きがい感は、一致度、ライフコースにかかわる3つの満足感すべてにおいて中程度以上の正の相関を示した。

Table 6 6群の各変数の平均値・標準偏差

		専母G	専母G	再就G	両立G	就継G	未婚G	ANOVA	下位検定結果
年齢	M	39.6	39.6	40.2	38.7	38.7	39.4	-	
	SD	(5.5)	(5.7)	(5.6)	(5.6)	(5.7)	(5.7)		
生きがい感	M	3.6	3.3	3.5	3.7	3.6	3.2	$F(5, 1194) = 6.7^{***}$	未婚G < 両立G・就継G・専母G*
	SD	(1.0)	(1.1)	(1.0)	(1.0)	(1.1)	(1.0)		専母G < 両立G*
夫婦関係満足感	M	4.2	4.7	3.6	4.0	4.7	-	$F(4, 995) = 25.2^{***}$	再就G < 専母G・専母G・両立G・就継G*
	SD	(1.3)	(1.2)	(1.6)	(1.3)	(1.1)			両立G・専母G < 専母G・就継G*
育児満足感	M	4.6	-	4.7	4.7	-	-	ns	
	SD	(0.9)		(0.9)	(1.0)				
仕事満足感	M	-	-	3.7	3.7	3.8	3.6	ns	
	SD			(1.1)	(1.0)	(1.0)	(1.0)		

*** $p < .001$, * $p < .05$

Table 7 6群における生きがい感と他の変数との相関係数

	専母G	専母G	再就G	両立G	就継G	未婚G
一致度	.55***	.51***	.56***	.50***	.37***	.36***
夫婦関係満足感	.53***	.49***	.43***	.61***	.34***	-
育児満足感	.59***	-	.46***	.58***	-	-
仕事満足感	-	-	.45***	.54***	.51***	.59***

*** $p < .001$

一貫性と満足感を独立変数とする階層的重回帰分析

6群それぞれについて、一貫性とライフコースにかかわる満足感が、他の変数の影響を統制して、生きがい感にどのように関係するかを検討するために、階層的重回帰分析を行った。従属変数を生きがい感とし、独立変数として一貫性のみを投入した場合と、一貫性とライフコースにかかわる満足感（1つのみ、2つ、3つすべて）を強制投入した場合を検討した。VIFはすべて1.5未満であったので、多重共線性の問題はないと考えられた。各群ともに、独立変数に一貫性とライフコースにかかわる該当する満足感すべてを投入した場合が、最も決定係数が大きかった。この場合をTable 8に示す。

この結果、ライフコースにかかわる満足感のいずれの β 係数よりも、一貫性の β 係数が大きい群は、専婦Gと再就Gであった。それら以外の4群では、一貫性よりもライフコースにかかわる満足感で大きい β 係数を示した。なお、一貫性よりも大きい β 係数を示したライフコースにかかわる満足感については、専婦Gは育児満足感、両立Gは夫婦関係満足感と育児満足感と仕事満足感の3つ、就継Gは夫婦関係満足感と仕事満足感の2つ、未婚Gは仕事満足感であった。

考 察

生きがい感とライフコースにかかわる満足感

各尺度の6群の1要因分散分析によると、生きがい感と夫婦関係満足感のみに6群の有意差が認められ、育児満足感と仕事満足感には6群における有意差は認められなかった。

生きがい感の下位検定では未婚Gは両立G、就継G、専婦Gより有意に低かった。すなわち、未婚Gは6群の中で最も生きがい感が低く、結婚していることは生きがい感を高めていた。これは、既婚者において生きがい感と同じくポジティブな感情である幸福感が高いという研究成果と一致している（白石・白石, 2006）。

ライフコースにかかわる3つの満足感の中で唯一6群の有意差が認められた夫婦関係満足感では、子どものいない群である専婦Gと就継Gが高く、次に子どものいる群の専婦Gと両立Gが続き、再就Gが最も低かった。すなわち、夫婦関係満足感には子どもがいない群が高く、子どもがいる群に低い傾向がみられた。子どもの誕生は女性の夫婦関係満足感を低下させているという山口（2007）の結果と一致する。また、女性の場合は、夫の育児参加が少ないことや子どもを育てにくいことが夫婦の親密性を低下させるとの指摘があり（小野寺, 2005）、子どもがいない方が夫婦関係満足感が高いことと関連すると考えられる。なお、再就Gの夫婦関係満足感が最も低いことの考察は後述する。

生きがい感と他の変数との相関係数

6群のそれぞれについて、生きがい感と一貫度

Table 8 一貫性とすべての該当する領域の満足感を独立変数とし、生きがい感を従属変数とする重回帰分析結果

β	専婦 G	専婦 G	再就 G	両立 G	就継 G	未婚 G
一貫度	.32***	.40***	.33***	.17**	.16*	.18**
夫婦関係満足感	.27***	.36***	.19***	.35***	.20**	—
育児満足感	.39***	—	.27***	.30***	—	—
仕事満足感	—	—	.18**	.25***	.43***	.54***
R^2	.54***	.37***	.46***	.60***	.34***	.38***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

ならびにライフコースにかかわる満足感は、中程度以上の正の相関を示した。すなわち、現実のライフコースと理想のライフコースが一致していると、生きがい感は高く感じていることが検証された。また、ライフコースにかかわる満足感が高くなると、生きがい感も高くなり、ライフコースにかかわる満足感から生きがい感を説明することも可能である。相関係数からは現実のライフコースと理想のライフコースが一致していることと現実のライフコースによる満足感のいずれからも生きがい感を説明できることが検証された。

一一致度と満足感を独立変数とする階層的重回帰分析

次に、一一致度とライフコースにかかわる満足感が生きがい感にどのように関係するかを検討するために、6群別に階層的重回帰分析を行った。一一致度とライフコースにかかわる該当する満足感すべてを独立変数として投入し、生きがい感を従属変数とする場合に最も決定係数が大きかった。6群のいずれにおいても一一致度とライフコースにかかわる満足感が生きがい感に影響していたが、一一致度と満足感のどちらが生きがい感に強く関係するかは群によって異なった。ライフコースにかかわるいずれの満足感の β 係数よりも、一一致度の β 係数が大きい群は、専婦Gと再就Gであった。すなわち、専婦Gと再就Gは、現実のライフコースに関するいずれの満足感を得るよりも、現実のライフコースと理想のライフコースが一致していた方が生きがい感に強く影響していた。それら以外の4群は、一一致度よりも生きがい感に与える影響が強くなるライフコースに関する満足感があった。

ライフコースに関するいずれの満足感よりも一一致度が生きがい感に強く影響する2群については、専婦Gは子どもがいないことを受容しがたく、再就Gは就業すること自体または就業内容

を受容しがたいため、一一致度の生きがい感への影響が強くなっていると考えられる。

一一致度よりも生きがい感に強く影響するライフコースに関する満足感がある4群において、子どもがいる2群（専婦G、両立G）は育児満足感の生きがい感への影響が強く、子どもがいない就業している2群（就継G、未婚G）は仕事満足感の生きがい感への影響が強かった。夫婦関係満足感の生きがい感への影響は、両立Gを除いて弱かった。すなわち、ライフコースに関する領域では育児満足感と仕事満足感の生きがい感への影響が強かった。子育てや仕事は生きがい対象として代表的なものであり（神谷、1966）、仕事満足感と育児満足感の生きがい感への影響が強いと考えられる。

Kumano (2018 a) では、生きがいを感じることに幸せを感じることの相違を実証的に明らかにしている。それでは、子育てや仕事は生きがいを感じることに分類されているが、夫婦関係を含む家族は幸せを感じることに分類されている。すなわち、夫婦関係は生きがいを感じることもより幸せを感じることに関係しており、生きがい感への影響は子育てや仕事ほど強くないと考えられる。

現実のライフコース6群の特徴

ここで、6群のそれぞれの特徴についてみていく。

専婦G 専婦Gでは、理想のライフコースと一致しているか否かが生きがい感に最も関係していた。専婦Gは就継Gとともに、夫婦関係満足感が子どものいる3群（専婦G、両立G、再就G）に比べると、高い傾向であったが、夫婦関係満足感だけでは、一一致度よりも生きがい感を説明できなかった。

専婦Gにおける理想のライフコースは、専業母親（53名、27%）、両立（47名、24%）、再就職（42名、21%）が多く、71%の者が子どもの

いるライフコースを望んでいた。母親になるという理想自己と現実自己の不一致により、落胆し、抑うつを経験するという自己不一致理論を適用した研究結果 (Kikendall, 1994) と同様に、本研究での専婦 G は、子どもを望んでいる者が 71% と多く、子どもをもち、母親として生きるというライフコースにおける理想自己をもっていて、子どもがいないという現実自己を受容しにくい者が多いため、理想のライフコースか否かが生きがい感に強く影響していると考えられる。

再就 G 再就 G は、ライフコースにかかわるいずれの満足感よりも、理想のライフコースと一致しているか否かの説明率が最も高かった。

再就 G における理想のライフコースは、両立 (69 名, 35%), 専業母親 (58 名, 29%), 再就職 (57 名, 29%) が多かった。理想のライフコースの 1 番目である両立は、結婚・出産前の就業を継続する希望をもっている、両立できず退職せざるを得なかったと考えられる。理想のライフコースの 2 番目である専業母親は育児に専念したいと考えながらも、経済的に再就職せざるを得なかったであろう。これらは、夫が家事・育児に協力してくれれば両立できたという思いや夫の収入が高ければ育児に専念できたという思いにつながり、再就 G の夫婦関係満足感が 6 群の中で最も低かったことの理由と考えられる。

専母 G 専母 G では、理想のライフコースであるか否かにかかわらず、育児満足感が生きがい感に最も影響していた。子どものいない専婦 G は、理想のライフコースであるか否かが生きがい感に最も影響していたが、子どものいる専母 G は理想のライフコースか否かにかかわらず、子どもを育てることにより得られる育児満足感が高いことが生きがい感につながっている。

就継 G 就継 G は、理想のライフコースであるか否かよりも、夫婦関係満足感や仕事満足感からの生きがい感への影響が強かった。

就継 G における理想のライフコースは、両立 (74 名, 37%), 再就職 (39 名, 20%), 専業母親 (36 名, 18%) が多く、75% の者は子どものいるライフコースを望んでいた。子どものいない専婦 G では、母親になるという理想自己と現実自己との不一致により落胆し、理想のライフコースであるか否かの影響が強かったが、子どもがいなくても仕事をもっている就継 G では、仕事からの満足感が理想のライフコースか否かを上回って生きがい感に影響していた。これは、家庭以外の領域として仕事をもち、仕事からの満足感を得ることが生きがい感を高めていると考えられる。すなわち、子どものいない女性にとって、仕事など子ども以外の領域で満足感を得ることが生きがい感につながっていると考えられる。

不妊治療に成功せず、5 年後までに親とならなかった者を対象とした研究では、これらの者は子どもをもつこと以外に人生の目標を見つけていた (Peterson, Pirritano, Block, & Schmidt, 2011)。これは、生きがい感を形成するプロセスの一つとして、ネガティブな状況を受容してコーピングするという生きがい形成モデル (熊野, 2012) で説明できる。

両立 G 両立 G は、ライフコースに関するいずれの領域の満足感も理想のライフコースとの一致度より、生きがい感に与える影響が強かった。それに対し、同じ両立している状態でも再就 G は、ライフコースに関するいずれの領域の満足感よりも、理想のライフコースとの一致度が生きがい感に強く影響していた。再就 G と両立 G は、現在のライフコースは育児と仕事の両方を行っているという意味では同じ状態であるが、理想のライフコースであるか否かの影響が両者で大きく異なった。

大学卒業後 31 年以上経過した女性医師を対象とした研究で、仕事を続けていてよかったという者もおれば、子どもに寂しい思いをさせた、仕事

も育児も中途半端になったと後悔を述べる者もあり、多様な回答であった（山崎・堀口・丸井、2010）。両立 G の中でも、育児と仕事が中途半端だと感じたり、子どもが寂しそうといった葛藤を感じたりする者がいると考えられる。しかしながら、両立していくことにより、育児と仕事の両立や母親意識への葛藤はあるが、仕事、夫婦関係、育児のそれぞれの領域から生きがい感を感じていると考えられる。

未婚 G 未婚 G は、生きがい感の得点が最も低かった。ライフコースにかかわる3つの領域のうち仕事にしか関与しないが、仕事満足感と生きがい感との相関は6群の中で最も高く、理想のライフコースと一致しているかよりも仕事満足感の生きがい感への影響が強くなっている。

結論

本研究では、成人期女性における生きがい感の規定要因を、現実のライフコースと理想のライフコースの一致度とライフコースにかかわる3領域の満足感の観点から明らかにした。ライフコースの現状で分類した6群のいずれにおいても、理想のライフコースとの一致度とライフコースの現状から得られる満足感のいずれもが生きがい感に影響していた。一方、6群によってどちらの影響が強いかが異なった。専婦 G と再就 G 以外の4群では、それぞれのライフコースにかかわる領域での満足感の生きがい感への影響が強かった。それに対し、専婦 G と再就 G は、理想のライフコースと一致度の生きがい感に与える影響が強かった。

本研究の課題と今後の展望

本研究における課題としては、以下の二点が挙げられる。第一に、ライフコースの現在の状況によって、該当する満足感の数が異なり、1つの場合もあれば、3つの場合もあることである。第二

に、ライフコースにかかわる3つの領域の満足感のみを対象としていて、その他のレジャー・趣味や地域・社会活動などの領域からの満足感を含んでいないことである。今後さらに、これらの領域を含めた検討を加えることで、多様な女性のライフコースにおける生きがい感形成についてより明らかにすることができると期待される。

我が国の現状では、結婚や出産は人生の選択肢の一つとして捉えるようになっており（厚生労働省、2013）、女性の生き方は多様になっている。その一方、未婚女性が理想とするライフコースと実際になりそうだと考える予定ライフコースの間にはズレがある者が多くなっている（国立社会保障・人口問題研究所、2015）。

本研究では、いずれの群でも、理想のライフコースであるかだけでなく、現実のライフコースにかかわる領域の満足感から生きがい感を高めることができていた。したがって、理想のライフコースでなくても、現実のライフコースでそこにかかわる各領域を充実させ、満足感を高めることで生きがい感を高くもって生きていくことが可能であろう。中でも、ライフコースにかかわる満足感より理想のライフコースであるか否かが生きがい感に与える影響が強かった専婦 G と再就 G は、ライフコースにかかわる領域を充実させるとともに、多様な生きがい対象をもつて、それ以外の領域での満足感を高めることによって生きがい感を高めることが、より望まれるであろう。

注

- 1) ライフコースとは社会学の専門用語としては、「個人が年齢別に分化した役割と出来事を経つた道」（Elder, 1977; 森岡, 1991）と定義されている。本研究では成人期女性のライフコースに注目するため、国立社会保障・人口問題研究所（2010）の出生動向基本調査での女性のライフコースを分類する方法を参考にし、「就職・結婚・出産などの人生の出来事をたどる道筋」と定義した。

付記

本研究は、平成26～29年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）, 課題番号26380911）の助成を受けた。

引用文献

- Carr, D. (1997). The fulfillment of career dreams at midlife: Does it matter for women's mental health? *Journal of Health and Social Behavior*, 38, 331-344.
- Crumbaugh, J. C., & Maholick, L. T. (1964). An experimental study in existentialism: The psychometric approach to Frankl's concept of noogenic neurosis. *Journal of Clinical Psychology*, 20, 200-207.
- 出村慎一・南 雅樹・野田政弘・石川幸生・野田洋平 (2002). 地方都市在住の在宅高齢者のモラルの特徴: 性と生活要因の観点から 日本衛生学雑誌, 56, 655-663.
- Diener, E. (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, 542-575.
- Elder, G. H. (1977). Family history and the life course. *Journal of Family History*, 2, 279-304.
- Frankl, V. E. (1947). *Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager*. Wien: Verlag für Jugend und Volk. (フランク V. E. 霜山徳爾 (訳) (1961). 夜と霧 みすず書房)
- 冬木春子 (2000). 乳幼児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因: 母親の属性およびソーシャルサポートとの関連において 現代の社会病理, 15, 39-56.
- 浜めぐみ・川原礼子 (1999). 高齢慢性透析患者の生きがい意識の関連要因 老年看護学, 4, 105-112.
- Hansen, T. (2012). Parenthood and happiness: A review of fork theories versus empirical evidence. *Social Indicators Research*, 108, 29-64.
- 長谷川明弘・藤原佳典・星 旦二 (2001). 高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察 - 生きがい・幸福感との関連を中心に 総合都市研究, 75, 147-170.
- 平山順子・柏木恵子 (2005). 女性の生き方満足度を規定する心理的要因 - 今, 女性の「しあわせ」とは - 発達研究, 19, 97-112.
- Hock, E. & DeMeis, D. K. (1990). Depression in mothers of infants: The role of maternal employment. *Developmental Psychology*, 26, 285-291.
- Holmes, E. K., Erickson, J. J., & Hill, E. J. (2012). Doing what she thinks is best: Maternal psychological well-being and attaining desired work situations. *Human Relations*, 65, 501-522.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2006). 職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響 - 妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討 - 発達心理学研究, 17, 62-72.
- 神谷美恵子 (1966). 生きがいについて みすず書房
- 河合千恵子 (1981). 老人における「人生の意味」意識 - PIL テストをもちいて - 老年社会科学, 3, 96-110.
- Kikendall, K. A. (1994). Self-discrepancy as an important factor in addressing women's emotional reactions to infertility. *Professional Psychology: Research and Practice*, 25, 214-220.
- 小林真 (1996). 母親の就労と抑うつに関する予備的研究 上田女子短期大学児童文化研究所所報, 18, 62-70.
- 小泉智恵・菅原ますみ・前川暁子・北村俊則 (2003). 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響 発達心理学研究, 14, 272-283.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2010). 第14回出生動向基本調査 Retrieved from http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/dk14_sq2.pdf (2019年11月16日)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 第15回出生動向基本調査 Retrieved from http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_gaiyou.pdf (2019年11月16日)
- 近藤勉 (1997). 生甲斐感への一考察 発達人間学研究, 6, 11-20.
- 近藤勉・鎌田次郎 (1998). 現代大学生の生きがい感とスケール作成 健康心理学研究, 11, 73-82.
- 厚生労働省 (2013). 平成25年版厚生労働白書 - 若者の意識を探る - 日経印刷
- 古谷野亘 (1981). 生きがいの測定 - 改訂 PGC モラルスケールの分析 - 老年社会科学, 3, 83-95.
- 熊野道子 (2012). 生きがい形成の心理学 風間書房
- 熊野道子 (2013). 生きがい形成モデルの測定尺度の作成 - 生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度 - 教育研究, 39, 1-11.
- 熊野道子 (2017). 乳幼児をもつ親の育児感情と自分の役割配分と幸福感の関連 *Journal of Health Psychology Research*, 29, 45-52.
- Kumano, M. (2018 a). On the concept of well-being in Ja-

- pan : Feeling *shiwase* as hedonic well-being and feeling *ikigai* as eudaimonic well-being. *Applied Research in Quality of Life*, 13, 419-433.
- 熊野道子 (2018 b). 乳幼児の父親・母親における子ども誕生後の生きがい感の変化－生きがい感に対する考え方と生きがいプロセスからの検討－ 大阪大谷大学紀要, 52, 121-135.
- Lawton, M. P. (1972). The dimensions of morale. In D. P. Kent, R. Kastenbaum, & S. Sherwood (Eds.), *Research, planning and action for the elderly* (pp.144-165). New York, US : Behavioral Publications, Inc.
- Lawton, M. P. (1975). The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- 前田大作・浅野仁・谷口和江 (1979). 老人の主観的幸福感の研究－モラル・スケールにより測定の試み－ 社会老年学, 11, 15-31.
- 牧野カツコ (1989). 〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討 家庭教育研究所紀要, 10, 23-31.
- Mathews, G. (2009). Finding and keeping a purpose in life : Well-being and *ikigai* in Japan and elsewhere. In G. Mathews & C. Izquierdo (Eds.), *Pursuits of happiness : Well-being in anthropological perspective* (pp.167-185). New York : Berghahn Books.
- 松浦素子 (2007). 新卒女子青年の入職と精神的健康の関連－仕事満足感とパーソナリティ特性の観点から－ パーソナリティ研究, 16, 124-126.
- 森岡清美 (1991). ライフコース接近の意義 森岡清美・青井和夫 (編著) 現代日本人のライフコース (pp.1-14) 丸善株式会社
- 諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10, 15-30.
- 内閣府 (2005). 平成 17 年版国民生活白書 子育て世代の意識と生活 国民印刷局
- 内閣府 (2008). 平成 20 年版国民生活白書 消費者市民社会への展望 時事画報社
- 内閣府 (2013). 平成 25 年版男女共同参画白書 新高速印刷
- 内閣府男女共同参画局 (2006). 平成 18 年版男女共同参画白書 国立印刷局
- 尾形和男・坂西友秀・福田佳織・森下葉子 (2015). 夫婦のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係、家族成員のストレス、家族機能に及ぼす影響 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 5, 35-43.
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志・飯田史彦 (2007). 大学生における生きがい感と死生観の関係 健康心理学研究, 20(2), 1-9.
- 小野寺敦子 (2005). 親になることにともなう夫婦関係の変化 発達心理学研究, 16, 15-25.
- Peterson, B. D, Pirritano, M., Block, J. M, & Schmidt, L. (2011). Marital benefit and coping strategies in men and women undergoing unsuccessful fertility treatments over a 5-year period. *Fertility and Sterility*, 95, 1759-1763.
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? : Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- Ryff, C. D., Boylan, J. M., Coe, C. L., Karasawa, M., Kawakami, N., Kitayama, S., ...Park, J. (2015). Adult development in Japan and the United States : Comparing theories and findings about growth, maturity, and well-being. Oxford library of psychology. In L. A. Jensen (Ed.), *The Oxford handbook of human development and culture : An interdisciplinary perspective* (pp.666-679). New York, US : Oxford University Press.
- 佐藤文子 (1975). 実存心理検査－PIL－ 岡堂哲雄 (編) 心理検査学－心理アセスメントの基本－ (pp.323-343) 垣内出版
- 澤田忠幸 (2006). 既婚女性の well-being と親となる意識の発達－夫婦関係との関連から－ 家族心理学研究, 20, 85-97.
- Schwartz, C. E., Quaranto, B. R., Healy, B. C., Benedict, R. H. B., & Vollmer, T. L. (2013). Altruism and health outcomes in multiple sclerosis : The effect of cognitive reserve. *The Journal of Positive Psychology*, 8, 144-152.
- 白石賢・白石小百合 (2006). 幸福度研究の現状と課題－少子化との関連において－ ESRI Discussion Paper Series, No.165. Retrieved from http://www.esri.go.jp/jp/archive/e_dis/e_dis165/e_dis165.pdf (2019年11月16日)
- 田中恵子 (2010). 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性 人間文化研究科年報, 25, 215-224.
- 上田路子・川原健太郎 (2013). 子どもを持つ若年層を対象とした幸福度に関する研究 ESRI Discussion Paper Series No.295. Retrieved from <http://www.esri>

go.jp/jp/archive/e_dis/e_dis295/e_dis295.pdf (2019 年
11 月 14 日)

山口一男 (2007). 夫婦関係満足度とワーク・ライフ・
バランス 家計経済研究, 73, 50-60.

山崎由花・堀口逸子・丸井英二 (2010). 女性医師の離
職問題に対する世代による意見の相違－順天堂大
学医学部の女性卒業生を対象とした質的調査－
医学教育, 41, 411-416.